

## 子ども世代と夫婦間介護

### － 親子の自立と依存をめぐる葛藤 －

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会臨床クラスター  
小西 崇子

親が配偶者を介護している家族の場合子どもは援助する立場にある可能性が高いが、就労や子育てと介護の間で複雑な意識を持っていると予想される。この研究の目的は①子どもは親の夫婦間介護をどう捉えているか②配偶者間で介護している親にとって子どもはどんな役割を果たすのか③親の介護姿勢は子どもに何をもちたらし、子どもは将来の親の介護をどうイメージするのか、を通して親が夫婦間介護をしている子どもの意識を知り、その家族の全容を照射することである。

研究協力者は30から50歳代の男性5名、女性3名であり親である介護者の年齢は60から80歳代、性別は男性5名、女性3名、介護期間は1年から17年であった。半構造化面接法にて得られたデータを逐語化し、修正版グランデッド・セオリー法を参考に分析した。

親が夫婦間介護をしている子どもは父親または母親が要介護状態であっても、他方の親がそれを補完し夫婦という単位が成立していれば親夫婦の自立性を尊重していた。また親を夫婦として存在させるため、親子の境界を明瞭にしようとする意思がある。この背景には、親には自立的に介護をおこなう能力があるという「評価」と、子どもの現在の生活を守りたいという「期待」がある。したがって子どもは親がおこなう介護に対して最低限の関与をする。子どもは親のおこなう介護を客観的に見ている。子どもの生活は大きく変化しないが、親が要介護状態であるにもかかわらず子どもの生活が変化しないことに対して軽い「罪悪感」を感じていた。また頼りにしている介護者の状態が変化すること、将来の介護が準備できないこと、2つの不安を抱えている。

夫婦間介護をする親との境界を保とうとする子どもの態度は、親を独立した他者と認め尊重する意思である。親世代にも「迷惑をかけない意識」に象徴されるように自立した生活を送りたい気持ちが強い。子どもはその気持ちに依存して自分の生活を守ろうとする。「罪悪感」「不安感」は親の介護から遠ざかることから生じる心理である。また親が要介護状態であっても親子には援助の互酬性がみられる。親が夫婦間介護をする家族には親子の自立と依存が共存し、両者はその間で揺れている。